

# Fresh Concert CMDJ 2010

～より豊かな音楽の未来をめざして～



開演前の演奏者および関係者の集合写真



① 岡田真実(ソプラノ)



② 小林萌里(ピアノ)



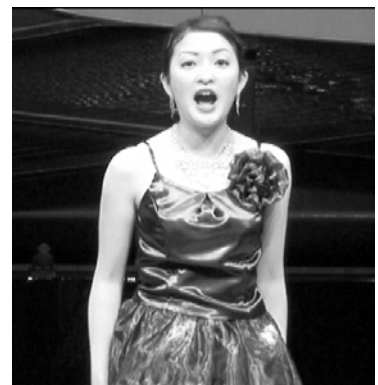
③ 大坪由衣(ソプラノ)



④ 宮下咲恵(ソプラノ)



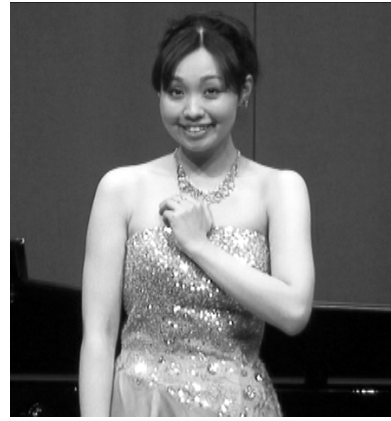
⑤ 恵藤幸子(ピアノ)



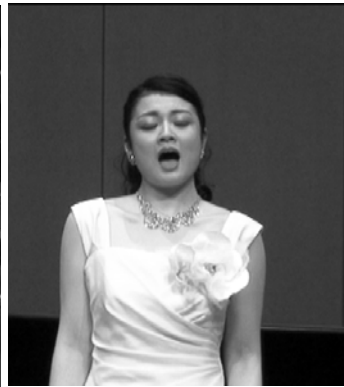
⑥ 秋山来実(ソプラノ)



⑦金管五重奏：左より角雅晃(Tp.)/齊藤嵩之(Hor.)  
三木博士(Tub.)永山千尋(Tb.)/伊藤緑(Tp.)



⑧清野友香莉(ソプラノ)



⑨鈴木菜穂子(Pf.)/秀川みすえ(Vn.) ⑩大久保雅代(ソプラノ) ⑪村松恒矢(バリトン)

《伴奏者たち》



稲葉 千恵



山木 千絵



森田 真帆



藤川 志保



白取 晃司



中澤 頼子

# 音楽の世界

## 目次

<b>グラビア</b>	<b>Fresh Concert -CMDJ2010-</b> . . . . .	1~2
<b>論壇</b>	<b>生まれ変わる歌舞伎座</b> . . . . . 中島 洋一	4
<b>小特集</b>	<b>ショパン生誕 200 年によせて</b>	
	<b>ショパン再考</b> . . . . . 北川 暁子	6
	<b>楽聖会見記：ショパン</b> . . . . . 夢音見太郎	9
<b>音楽時評</b>	<b>なんぼなんでも 8 / 演奏会とトーク 11 / 美術と音楽 14</b>	
<b>連載</b>		
	<b>音・雑記一ひなの里通信一 (28)</b> . . . . . 狭間 壮	12
	<b>名曲喫茶の片隅から (9)</b> . . . . . 宮本 英世	15
	<b>新編集体制発足</b>	
	<b>編集長交代の理由と経緯のご報告</b> . . . . . 理事会・機関誌編集部	17
	<b>新編集長挨拶</b> . . . . . 中島 洋一	18
	<b>新副編集長挨拶</b> . . . . . 橘川 琢	20
<b>コンサート・レポート</b>		
	<b>Fresh Concert -CMDJ2010-</b> . . . . .	22
	<b>日本音楽舞踊会議・作曲部会公演「ソロと室内楽への誘い」</b> . . . . .	29
<b>CMDJ</b>	<b>会と会員の情報</b> . . . . .	32
	(新入会員紹介)	34

作曲 中島 洋一

4月は歌舞伎座のさよなら公演の話題がテレビのニュースを賑わした。歌舞伎座は4月30日の閉場式をもって、現建物での公演を終了し、新しい歌舞伎座の新築工事に入る。現在の歌舞伎座は、空襲で焼けた第三期歌舞伎座の後をうけて、1951年に建てられたもので、第四期にあたるそうである。終戦後しばらく経ってから建てられたのは、物資の乏しい時代だったからであろう。

私は、歌舞伎通ではないが、私の実家や親戚には大の歌舞伎マニアがいる。私が小さな子供だった頃の話だが、私の田舎に歌舞伎で端役をやっていた俳優崩れの人が住み、芝居好きの町民達を指導していたこともあって、田舎芝居が結構盛んだった。よく演じられていたのが『太功記』の10段目である。戦場（史実では山崎の戦い）で深手を負った光秀の息子十次郎が刀を杖に、よろよろと登場するシーンは今でも目に焼き付いている。本来は悲惨な場面であるはずだが、演じているのが素人役者で、周りから野次が飛んだりするので悲壮感は感じなかった。

母、姉、叔母に連れられ、東京で初めて歌舞伎を観たのは、私が小学校三年の夏休みの時だったから、1950年8月のことである。この時は、昼は歌舞伎で演目は「鷲娘」、夜はオペラで演目は「トスカ」ということで、和洋の音楽ドラマの鑑賞を押しつけられ、頭がパニックになりそうだったが、むしろ当時の私にはオペラより歌舞伎の方が退屈せずに観ることが出来た記憶がある。その頃は、まだ歌舞伎座は建設中で、他の会場で上演されていた筈である。

歌舞伎の世界というと、家柄がものをいう世界と思われがちだが、家柄が良ければ役者としての評価が得られるというような甘い世界ではないようだ。私の祖父は商人だったが、美術や芝居を愛した風流人で、東京の画家や歌舞伎役者と交流があった。その中に九代目市川団十郎の婿養子で銀行員から役者に転身した市川三升(さんしょう)という役者がいた。祖父は私が物心ついた頃病死したので、祖母から聞いた話だが、日本画家の鏑木清方が祖父に「三升は字も巧いし、絵も巧いし、芝居をしなけりゃ良い男だ」と語った。祖父が三升到「清方先生が三升さんは字も巧いし、絵も巧いし、良い男だとおっしゃっていましたよ」と言ったら、「芝居をしなけりゃ」だろう、と言り返されたそうである。おそらく、この人は、歌舞伎が好きでたまらず団十郎の婿養子になったのであろう。さすがに生前に十代目団十郎の名跡は襲名出来なかったが、死後、歌舞伎界への功績（役者としてではなかろう）が評価されてか、十代目団十郎の名跡が贈られている。

歌舞伎座では1980年頃までは歌舞伎以外の興行を行ったこともあったが、その後は歌舞伎専用の劇場となった。本年建て替えが始まることになったが、建て替えを前にして昨年1月から本年4月までの16ヶ月間「歌舞伎座さよなら公演」が行われた。私は歌舞伎座には、たまにしか足を運ばないが、正面玄関の丸みのある破風屋根が目に入るとワクワクしてくる。館内に入ると真っ赤な絨毯と沢山の赤提灯が出迎えてくれる。事前に予約しておくのだが、30分ほどの幕間を取る食事もまた楽しい。伝統芸能の中でも、特に歌舞伎は平成の世になってむしろ盛んになって来ているようだ。なぜだろうか？その理由の一つは、歌舞伎という芸術が伝統を大切にしながら革新性を抱え込める懐の深さをもっているからではなかろうか。海外における歌舞伎の注目度も高く、市川座のパリ公演、中村座のアメリカ公演、あるいは、パリ、オペラ座のリムスキー・コルサコフの『金鶏』を演出した市川猿之助の活躍など枚挙に暇がない。もう一つの理由は、俳優達の芸の質の高さと深さであろう。それは歌舞伎以外の場でも発揮される。大分昔のことだが、板東玉三郎がシェイクスピアの『マクベス』のマクベス夫人を演じたのを観たことがある。玉三郎が演ずる悪と罪の匂いを漂わせた中年女の妖しい美しさは、女優ではとても演じきれないのではないかと思わせるような鬼気迫るものがあった。テレビの時代劇ドラマでも、先代幸四郎→吉右衛門と親子で引き継がれた『鬼平犯科帳』なども、通常のテレビ俳優からはなかなか得られない芸の重さを感じさせる。また、「海老さま」と称され、女性から大人気だった祖父で名優の11代團十郎の再来かと思わせる才能と容姿を持つ現市川海老蔵、市川猿之助の息子で大変な勉強家であり芸達者な市川亀次郎など、若く魅力的な役者が続々と育って来ている。

クラシック音楽と歌舞伎を比較するのには無理があろうが、歌舞伎の演技からは生き生きとした今を感じずるのに対し、クラシック音楽の演奏は上品だが骨董品的で生気に乏しいと感じさせることが多くはなかろうか。クラシック音楽の演奏家を目指す人々にとって、今の時代は、芸を磨くことに精進出来る環境が整っているとは言い難かろう。しかし「生気」とは内から溢れ出るもので、必ずしも勉強を積み重ねるだけで、生み出せるものでもなかろう。

さて、歌舞伎に話を戻すが、私のように歌舞伎座に足繁く通わなかった者にとって、今の歌舞伎座に対してそれほどの未練はない。むしろ、三年後に第五期となる新歌舞伎座が開設されるのが楽しみである。建物は地上29階地下4階の高層ビルになるそうだが、正面玄関の破風屋根や、赤提灯はそのまま残りそうである。赤い絨毯はどうなるのであろうか。新しい歌舞伎が伝統性と革新性のバランスをどのようにとって展開されるか、ワクワクしながら待っている。

(なかじま・よういち 本誌編集長)

今年にはショパンの生誕 200 年に当たり、ショパンをテーマとした催しが世界中で行われています。ショパンとは、音楽に関心のない人でもその名前くらいは知っていて、ピアノの詩人という代名詞と結びついて認識されている存在ではないでしょうか。そしてその音楽は美しいメロディーと快い和音の響きに満たされた優雅なものである、と思われているのではないのでしょうか。確かに、同じ 1810 年に生まれたシューマンは、より文学的要素の強い幻想的な音楽を生み出しており、1811 年に生まれたリストは、ピアノという楽器を徹底的に鳴らす豪快な作風を選びました。そのふたりとの比較で大まかに言えばショパンの場合は優雅な音楽と言えるでしょうが、決してそれだけではないように思えます。私も、大学時代まではそれに近い感覚を持っておりました。美しいメロディーに浸りながら、どうすればより美しくなるか工夫しながら練習するのですが、ひとつの曲の中に必ずメカニク的に難しいところが出て来るのです。そんな箇所は、優雅になぞ扱えず、たくましい指を持って弾かねばなりません。繊細だと思っていたショパンにもこんな一面があるのか、と不思議な気がしたものです。以来、ショパンに関わるいろいろな本を読んだりして、ハーモニーの構造も良く分かるようになって来て、ショパンという人がもう少し理解出来るようになったように思います。又、実際にワルシャワを歩いたり、ショパンの生家でのコンサートで演奏したり、パリでのショパンの足跡を辿った（お墓まで）ことも、理解の助けになったかも知れません。



ショパンはロシアに占領されていたワルシャワでフランス人の父とポーランド人の母との間に生まれました。ワルシャワで多方面の教育を受け、音楽学校にも通ったそうです。ちょっと話が逸れますが、その時代、ドイツにもフランスにも音楽学校があったという話は聞いたことがありません。シューマンにしる、リストにしる、個人的に先生に師事していた筈です。教会関係でなく、一般に開かれた学校であったなら、その時代としては画期的なものではなかったかと思いますが。音楽学校での師・エルスナー氏はドイツ系でなくボヘミア系のひとでありそのような教育を与えた、とされています。特にバッハの偉大さを良く伝えたそうです。これは後年のショパンの作品によく現れるポリフォニーを見れば納得がいきます。又、ショパンの曲では装飾音を拍の前

に出さず、拍の頭から始めますし、トゥリルは原則として上から始めます。これはまさかバッハ直接の影響とは思いませんが、メロディーを十分に歌いたい彼の気持ちとバッハが偶然一致したのかも知れません。

20才までワルシャワにいたショパンはかなりの作品を完成させています。後にシューマンを感激させたドン・ジョヴァンニの変奏曲、第2番のコンツェルトなどは勿論、作品10のエチュードもかなりの部分が出来上がっていたようです。更に、第2番より大規模な第1番のコンツェルトも一部手がけていたようです。そうして見ると、相当に早熟なひとで、その作品は優雅さと共に力強さと澁刺とした若さを備えていると感じます。

その後の半生はパリに暮らすことになりますが、混乱のワルシャワを後にして来ている亡命者の気持ちが多分にあったと思います。父親がフランス出身ですから直ぐにパリに溶け込めた筈ですが、一方では召使いがポーランド人であったという面もあります。ショパンの作品はパリの人々に歓迎されましたが、作品のジャンルはさまざまです。ノクターン、ワルツ、エチュード、プレリュード、ソナタ等普遍的なものから、ポロネーズ、マズルカ、クラコヴィアック等ポーランド独特の性格を持った作品まで。作品の内容については、ABAの定形を殆ど変えずに書いた曲である多くのノクターンやエチュード、スケルツォなどの場合、形式では伝統に則りながらハーモニーやその扱い方によって来す転調には思いがけない程の斬新さがあり、驚くばかりです。リズムに対する敏感さもすばらしいと思います。ノクターンなど、同じメロディーでも出て来る度にリズムが違って雰囲気を変えています。形式の面で工夫の見える曲もあります。例えば第2番と第3番のソナタはまるで違います。バラードやポロネーズなどは従来のパターンに当てはまらないことをしています。



ショパンが愛した  
プレイエルピアノ

この時代は又、ピアノの楽器が現代のものに殆ど似たレベルまで発達しました。楽器の能力が大きくなれば、それに伴う手の技術も発達させねばならず、多くのエチュードが生まれました。リストは外面的に派手な技巧の獲得させる方向を開拓しましたが、ショパンは3度や6度やオクターヴを使うことによって関節を拡張、しっかりしたタッチできれいに歌うことを目指したと思います。彼のエチュードの半分以上は重音を使った曲で、音程としてはそんなに難しくないのですが、きれいに歌う為には指の強さが必要です。彼は手の構造を良く知っていて、スケールで一番難しいのはC-Durだと言ったのだそうです。当時、そんな真実を看破したひとはい







ようこそ。とうとう日本を訪れてくれましたね。お待ちしておりました。《Chop：三日前に「ショパン先生！」と呼ぶ君の声が聴こえたので、すぐ天から降りてきたのだよ。《夢音：随分前から呼んでいたのですが、声が小さくて届かなかったのかなあ。《Chop：それは君の呼び方が真剣でないからさ。若い頃は下手くそなピアノで私の曲をよく弾いてくれていたが、最近はずっぱりではないか！《夢音：すみません！本当にすっかり御無沙汰してしまいました。ところで三日間滞在して、日本の印象はいかがですか？《Chop：とにかく、街のあらゆる所が音で溢れていて、神経衰弱になりそうだ！こんな騒音の洪水の中で生活している人間が、はたして私の音楽を理解しうるものかどうか、少々不安になってきた。

### 女性について

《夢音：日本の女性についてはどうですか？《Chop：電車の中で若い女性と向かい合って座ることがあるが、短いスカートから惜しげもなく素足を投げ出しているのを見て、思わず顔を赤らめてしまった。なかなか美しい子もいるが、やや、恥じらいとか慎みとかいったものに欠けるようだ。昔の若い女は普段は慎み深かったが、いったん恋に陥ると激しく燃え上がったものだ。今の若い女はややふしだらになった分、かえって本当の情熱の方は薄れてしまっているのではなかろうか。《夢音：ジョルジュ・サンドはどんな人だったのですか？彼女はふしだらではなかったのですか？《Chop：(激怒して) 彼女は断じてふしだらな女ではない！彼女の愛は真実に満ちあふれ、しかも彼女はそれを行動で示してくれた。彼女は実に献身的で、気難しい私に対していつも寛大だった。ただ・・・(ため息をつく) 彼女はあまりにも寛大すぎたので、誰でも彼女の前では思う存分わがままに振舞った。彼女の子供達もそうだった。彼女は子供達を甘やかしすぎた。本当にろくでもない子供達だよ！（ショパン先生の顔が苦しそうに歪んだ）。



### 日本のピアニストについて

《夢音：日本のピアニストについては？《Chop：そう！昨日、君から紹介された若い女性ピアニストにレッスンをしてあげた。彼女はすっかり興奮して僕の前でバラードやエチュードを弾きまくった。それで僕はベートーヴェンの作品26の第3楽章を弾かせた。僕以外の作品を選んだので彼女は意外に思ったようだが、一つの和音、一つのPにどれだけの深い感情が隠されていて、それが曲の中でどのように発展して行くかということ、十分に感じとって演奏して欲しかったからだ。彼女は実に良く練習するし決して演奏も粗雑

ではないが、あれだけの長い時間弾き続けると、感性が疲弊し、音楽が枯渇してしまうのではなからうか？勤勉さだけでは良い音楽は作れない。

《**夢音**：日本の伝統音楽についてはどう思われますか？先生は一昨日皇室に招かれ、雅楽を熱心に聴かれましたね。《**Chop**：あのおおらかさと静寂が、なんともすばらしい。あのような音に浸ってられる人々を本当に羨ましく思う。私の心は、時折嵐のように襲う悲しみと、怒りの感情にいつも苛まれていた。私が心の平穏を得たのはジョルジュ・サンドと過ごした数年間だけだ。《**夢音**：そういえば先生の曲には美しくうっとりした楽想の中に、突然悲憤の楽想が顔を覗かせるような所がありますね。たとえば作品32-1のロ長調のノクターンを初めて弾いた時、最後の方で急に気分が変わってしまって思わずドキッとしてしまいました。《**Chop**：私は作曲家だ！作品のバランスを著しく損なうような気まぐれさは放ってはおけない。ただ自分の感性が自然に導いた楽想の変化には、それなりの説得力があるものと思っている。作りすぎて、感性が乾いてしまうような音楽を書いてはいけないのだ。』

## レコードと電子楽器について

《**夢音**：先生は御自身の音楽が御自身の感性を裏切ることを決して許さなかった音楽家ですね。ところで先生は今朝、某大学のスタジオに立ち寄り、先生の時代には想像もつかなかったような、電子楽器や電子機材に触れられたそうですが、印象はどうですか？

《**Chop**：まず、キーボードを弾かせてもらった。僕は鍵盤を見ると頭の中にすぐピアノの響きが浮かんでくるのだが、弾いてみたら、まったく違った色々な音が出てきたのでびっくりした。ただ、ピアノはタッチの繊細な変化で、演奏者の感性の陰影を微妙に伝えることができる。どうも電子楽器はまだそこまで行っていないようだ。多様な音色を得るという面では凄い能力を持っているようだが？ 《**夢音**：おっしゃる通りですね！では、他の機器も含めどのような判断をされますか？ 《**Chop**：コンピュータが私の曲を私が逆立ちしても弾けないようなテンポで演奏したのを聴いて、いささかびっくりした。またコンピュータでも上手に使えると結構表現力のある演奏が出来ることも解ったが、ただレコードと同じように何回演奏してもいつも同じニュアンスで演奏するのだ。音色やテンポを自由に変えることは可能だが・・・しかし総合的にみると本当に色々な響きが出せるのでとても面白かった。もし今生きていたら、これらの機器を使って作曲してみたいものだ。ピアノとはまた違ったポエティックな世界が開けるかもしれない。《**夢音**：今レコードの話が出ましたが、レコード芸術についてどう思われますか？ 《**Chop**：私は自分の曲を演奏する際、装飾音などの弾き方はいつも変えていた。つまり人の感性は時とともに変化しており、その感性に忠実に演奏したとしたら、その時々により、同じ曲を弾いても決して同じ演奏にはならないはずなのさ。もちろん優れた演奏は何度聴いても良いものだし、今の時代に生きていたら私も利用しただろう。ただ同じ曲でも、演奏者のその時の状態や聴衆の反応



そして、それから

118年の歴史を閉じた村にて

武石（たけし）地区は、長野県上田市の西のはずれに位置する。以前は武石村といった。美ヶ原の東側の山裾、豊かな緑の中にある。平成の市町村合併により、上田市に吸収されるかたちで合併した。

私の住む松本は、美ヶ原をはさんで反対側になる。武石へは、山裾に沿ってぐるりと車で走って、吾が家（や）から1時間半ほどの行程だ。



武石の公民館でコンサートがあった。男女共同参画の事業で、題して「歌・手をつないで故郷（ふるさと）」。

地域の催しものには、それぞれいろいろな狙いがあるものだが、今回のそれは、音楽（歌つき講演）を通して、人権や、男女共同参画社会への問題意識を高めよう、というものだ。なかなか欲ばりな企画。難しい。

おいそれとは引き受けられない。担当のS氏が、いや、いつものように、などと景気をつける。で、つまりは引き受けてしまった。

氷雨の降る2月。あいにくの天気ではあ

ったが、130人の大勢（関係者の発表）が、会場を埋めた。男女共同参画や人権への意識が高い人が、こんなにも集るとは。松本市との人口比でいえば、9000人をこえる参加者になる。ありがたいやら申し訳ないやら。こうなりゃ気分は日本武道館である。

男女共同参画社会の理念の基は、日本国憲法。その第14条、法の下での平等の、女性の参政権をはじめとする平等。また第44条では選挙権と被選挙権について。そして第24条では、婚姻における男女の平等や、家庭生活における両性の差別を禁じるどころまで、憲法は男女の同権をうたっている。しかるに現状はどうであろうか、などと少々力（りき）んでみたりして・・・。「それにしても寒いですね、春が待ち遠しいです。歌は『春よ来い』から、といきましょか！」なんてことに。

さて武石村は、平成18年3月に118年の村としての歴史を終えた。村民の感慨、いかばかりか。村には2曲の村歌がある。「見よ美（うつく）しの歌」と「武石讃歌」である。

朝な夕なに美ヶ原を仰ぎ、その麓に展開される人々の平和な日々の営みが、豊かな

自然の中に謳(うた)われているのだ。ともに村民の愛唱歌になっている。



ステージの終りに、この故郷(ふるさと)の歌を歌う。「武石讃歌」の作曲者は、井上武士。思い出すのは、「梅の小枝でうぐいすは・・・」で始まる「うぐいす」や、「うみは広いな大きいな・・・」の「うみ」の作曲者としてだ。かつて井上先生は、武石中学校に校長として勤務していた。その後先生は東京へ。そしてぐうぜんのことであったが、私はその近所に住んでいたのだった。その地域の小学校、私の母校の校歌は、井上先生が作曲された。私たちは、その校歌を誇らかに歌った。今でもしっかり歌える。

歌う前に紹介したエピソードである。松本に暮らして39年。庭からのぞむ美ヶ原の山の向こうの村を、初めて訪ねた。そこは武石(たけし)の里。その地を讃える「武石(たけし)讃歌」、作曲したのは井上武士(たけし)。そしてそれを歌う私、狭間壮(たけし)。

ぐうぜんのご縁。ただそれだけのダジャレ話を喜んでくれる地域の人々の輪の中で、「武石讃歌」を歌う。会場が声を合せる。地域の人を励ます歌がある。その歌が私をも勇気づけてくれる。

100年以上も続く村の歴史に終止符を打ち、穫(え)られた果実は、果たして美味なるものであったか。きめ細かになされていたであろう住民サービスの質は低下してはいないか。

平成の合併には合併特例債というアメが配られた。それは住民のために有効に使われたか。結果としてそれらは将来への負担にならないのだろうか。これらはひとり武石地区の問題にとどまらないのだが。

とにもかくにも、少子高齢化や過疎への対策、中山間地域の農業を始めとする就労、経済への波及等々、地域活性化への課題は山積。これら解決の糸口は、結局は住民の自立、自治への積極的参加の意識の中に見い出されるのだろう。

「さて、地域の自立、自治への気概、それを根底から支える精神は、一つは『男女共同参画』への理解と共感によって鍛えられるものだと、私は確信しています」こんなメッセージをコンサートの結びにした。

武石地域では、その活性化の一つとして、花木の植栽をすすめているという。谷間(た







## 連載 名曲喫茶の片隅から

宮本 英世

### 第9回 ビヤ・ホールのディーヴァ（女神）たち

ビールが大好き、50年来の愛飲派である。きっかけはベートーヴェン研究で有名だった音楽評論家・武川寛海氏と知り合ったことだった。息子さんの一人がロック・グループ「ゴダイゴ」のヴォーカル、タケカワユキヒデさんといえば思い出す人もいるだろう。氏は既に故人なのだが、とにかく大変な愛飲家。ビール好きが集まる高名な「金曜会」の主要メンバーで、TBS、上野学園大学などに勤めながら多くの原稿を書き、夜は暇さえあるとビールを飲んでいた。

ベートーヴェン好きとレコード制作の関係でお付き合いすることになったのだが、親子ほどに年令が違うのになぜか相性がよく、30年以上もあちこちと飲み歩き、最後は氏の地元、浦和まで出かけるほどだった。そんな時、酒の肴は常にベトちゃん（ベートーヴェン）と、満州の思い出、そして作曲家のエピソードなど。

後に多くのエピソード本を出版されて話題になったが、仕掛け人はじつは私である。それまで氏は翻訳本とか堅い本しか出しておられなかったからである。ベートーヴェンの「不滅の恋人」がアマリエ・ゼーバルトであるとか、「ハイリゲンシュタットの遺書」が文字による即興詩であるといったユニークな意見は独特で興味深く、作曲家談義は何年続けても退屈することがなかった。

ライオン、ミュンヘン、ベルマンズ・ポルカ、酒場「コロムビア」、「桔梗」といった場所を変えてのビール談義の中でも、特

に気に入っていたのが、ナマ演奏の聴けるビヤ・ホール。特に池袋にあった「ライオン」である。数人のディーヴァ（女神）たちが、ピアノやヴァイオリン、アコーディオンなどを伴奏にいろいろな歌を聴かせてくれる。オペラ・アリアもあれば歌曲、民謡、ミュージカルなどそれこそ何でもありで、しかも客席からほんの1～2メートルの距離。迫力はあるし、表情・仕草が手にとるようにわかる。コンサート会場とは違う生々しさと親近感がじつに心地よく、私には彼（女）らの顔や演奏を見るのも大きな楽しみであった。

地元でもあり、一人でもよく出掛けるようになったが、最前席に坐り常連ともなると、当然演奏家たちと話す機会が出来る。そしてあれこれとプライベートを知ることにもなったが、客たちに愛想をふりまき、美声でモテモテの彼女らにも、じつは多くの悩みがあると知ったときには、思わずジョッキを置いたほど切ない気分になった。というのも私のイメージでは、高い授業料を払って音楽大学を出る。それだけでも裕福な人種だと思っていたのに、卒業後それで食べていくのは大変で、親の援助で海外留学する人たちがいる一方で、自立し一生懸命に働いている人もじつは大勢いるのだとか。演奏するのは確かに楽しいが、仕事としては大変に厳しい。酒場のギャラは決して高くなく、しかも出演希望が多いため経営側はとにかく新人をとりたがり、いき



おいコマ切れの仕事になりがちなのだそうである。そういえばあるナイト・クラブが演奏家を募集したら、何十人もの人が押しかけたという話を聞いたこともあった。



そればかりではない。折角演奏していても、飲んだり食べるのに夢中でまったく見向きもしない酔客や、大声で喋る客、とんでもない難曲を

リクエストして「なんだ出来ないのか」「知らないのか」と吐き捨てるように言う、そんな客も時にはいるのだという。まあ、本来はビールを飲むのが目的の店なのだから仕方がないといえばそうなのだが、音楽好きにはこういう話はいかにも切ない。「そんな連中も、世の中にはいるよ。気にしないで自分のペースでやるしかないよ」「もしかして専門家も来ているかもしれない。気を抜かないで」と慰めたりしたが、そんな彼女らも最後は明るい顔で「でも同情なんてしないで下さいね。これでも歌っていれば楽しく、常連さんの顔を見るとホッとするんですから」と言う。そう、音楽のいいところは、これなのだ。歌うにしろ聴くにしろ、その中から私たちはいろいろなプラス

を享受することが出来る。だからこそ好きな人は辛くても苦しくても、離れることが出来ないのである。

不景気のせい、世の中の流れのせい、その後「池袋ライオン」はナマ演奏を止めてしまった。武川氏も亡くなって十数年。一人ぼっちになった私も。永年の飲み過ぎからか近頃は「痛風」に悩まされ、かつてのように思いきり飲むことが出来ない。それでも自宅ではチビチビと飲んでいるし、淋しさに我慢できなくなると、本店である「銀座」のライオンへ時には行く。こちらはまだナマ演奏を続けていて、同じような音楽家たちが、同じような曲目を演奏しているからだ。かつて味わった懐かしい雰囲気になりながら、私は空想する。あの時歌ったり演奏していた人たちは、今頃どうしているだろう。その後どこかへ移って、変わらずに演奏しているのだろうか。それとも結婚し家庭に落ち着いて、平和に暮らしているのだろうか。止めてしまったのだとしたら惜しい。あんなにいい声をしていたのだから——などとセンチな気分になっていると、突然耳許で「ビール、お代わりいかがですか」と元気な声がする。いつの間にか演奏が終わって、休憩タイムになっているのである。

**【宮本英世氏プロフィール】**1937年、埼玉県生まれ。東京経済大学経済学部卒。日本コロムビア（洋楽部）、リーダーズ・ダイジェスト（音楽出版部）、トリオ（現ケンウッド）系列会社社長を経て、現在は名曲喫茶「ショパン」（東京・池袋）の経営ならびに音楽評論、著述、講演、講座などを行う。著書は「クラシックの名曲100選」（音楽之友社）、「クイズで愉しむクラシック音楽」（講談社）、「喜怒哀楽のクラシック」（集英社）など多数。



## 新編集体制発足

### 編集長交代の理由と経緯のご報告

日本音楽舞踊会議 理事会・機関誌編集部

このたび本号6月号より本誌編集長が交代しました事につきまして読者の皆さまにも、事情を説明し、ご理解およびご了承を賜りたいと考え、そこに至る経緯について、ご報告申し上げます。

本誌は『本会の機関誌として会員の共同出資により運営され、芸術・文化環境の向上のため、芸術に関わる者が自由に発言できる言論機関としての役割を貫くこと』を基本理念として、発行を続けて参りました。

編集にあたりましては、編集長のリーダーシップには期待しつつも、独断を許さず、毎号の特集についても、それぞれのスタッフが担当して行くことで、編集においても多様性と民主性の維持に心掛けて参りました。

それが本年1月号の「特集・立体批評の試み」の掲載を期に大きく崩れる事態となりました。

この特集は、はじめ、往年の放送音楽現場を回顧する対談の企画でしたが、対談者のご病気により急遽、編集長担当企画としてこの特集に変更され、発行への時間的制約があったものの、特集名、特集内容がスタッフにも知らされぬままの発行となってしまいました。

特に問題になったのは、機関誌の最終校正は、複数の編集部員の手で行うことが原則となっておりましたが、「特集・立体批評の試み」については、編集長が校正にかけることを怠り、特集の全容を編集スタッフが把握することが出来ぬままでの発行となってしまいました。

発行後、関係者からこの特集へ多くの批判がよせられ、理事会では野口編集長と関係者が話し合う場を設け3月号に反論掲載をする事と決めました。

また、2月11日に行われた本会第48期定期総会で、編集長の独断的行為を許した編集体制について問題を提起する緊急動議が提出され、審議されましたが、時間の制約から結論は出さず、後の理事会に決定を委ねる事になりました。

2月19日、臨時理事会では、1) 特集で批評された方全員の意見を3月号に掲載する事。2) 本誌の標榜する民主的編集が崩れないように、複数の編集長と同等の決定権を持つ者（仮に複数編集長とした）を、本年度は3名置き、いかなる事情があろうとも、最低この3名は最終校正に関わる事を決議しました。個人の独断による掲載内容の決定を許さ

ないための措置です。

ところがその後、野口編集長によって、複数編集長制への反対から「会と会員の情報」掲載拒否の申し出や立体評論に4／5月号で再反論する予告の掲載などの行為が、総ての会議に欠席のままなされました。

3月8日の定例理事会では、1)今年度機関誌編集部人事(仮称3編集長の役目及び名称の明確化・編集スタッフの選任)決定の為、編集長(仮称)に選任された野口剛夫、中島洋一、橋川琢の3氏による会談を要請。2)立体評論に対する再反論の掲載保留を決議し、野口編集長に通達しました。これに対し、理事有志の説得に了解を表明したにも拘わらず、再反論のみならず個人的人事不満に及んだ文を独断で投書として掲載の挙がなされました。

4月7日に開かれた定例理事会で、野口剛夫編集長の長年に亘る努力と功績には感謝しながらも、民主的編集を行う本誌を編集長の私誌には出来ないとして、やむをえず解任を決議致しました。

以上のような経緯でございます。読者の皆さまにも事情をご了解頂き、急遽の交代となりましたので当座は不手際が有るやも知れませんが、新編集長、新編集部への更なるご支援、ご鞭撻をお願い申し上げて報告致します。



## 新編集長からのご挨拶

中島 洋一

半年前には予期しなかったことですが、本年6月号より、『音楽の世界』の編集長を仰せつかることになりました。色々な仕事をいただいている上、さらに編集長の大任をお引き受けするとなると、私には荷が重すぎますが、編集部や事務局の皆さんが全面的に協力して下さるということですので、お引き受けすることにいたしました。

編集長の役職は、私にとって初めての経験ですが、編集部のメンバーとしての経験は、前編集長の野口氏よりずっと長く、1988年から編集のお手伝いを始めていますから、すでに22年の時を経ています。その間、編集長は矢沢寛氏、助川敏弥氏、野口剛夫氏と三代変わりました。私が編集メンバーに加わった初めの頃は、まだ、電子メールも普及しておらず、編集会議で集まった原稿を廻し読みしたりし

て、「あーでもない、こうでもない」と意見を闘わせたものですが、会議が終わった後、みんなで軽く一杯やりながら駄弁るのが楽しみでもありました。今は、電子メールなどのメディアが普及し、情報交換が楽になりましたが、私が編集長に新任されたのを機に、かつて毎月開いていた編集会議を復活させるつもりです。最近でも、一月か二月に一回程度、編集会議が開かれていたのですが、スケジュールが編集部員以外に公開されていなかったため、一般会員は編集会議の存在を知りませんでした。新編集体制が発足したこの機会に、かつてのように編集会議のスケジュールを公開し、編集部員でない一般会員でも興味があったら自由に会議に顔を出せるようにしたいと思いますし、また会員以外の人でも編集部員の推薦があった場合は、編集会議に顔を出すことを認めるようにして行きたいと思っています。もちろん、メールによる意見交換も活発に行うつもりですが、人が直接顔を合わせて話し合うことから、メールや電話では得られない刺激や、発見が期待できると思うからです。

雑誌の内容につきましては、「特集」や、連載物など、今まで成果を上げていた企画については踏襲して行くつもりですが、月刊誌の特徴を生かし、今の時代を感じ取りそれを読者に伝える同時代性というものをもっと強く打ち出して行きたいと考えております。論壇などもそうですが、今起きていることに対する鋭く短い批評文を「時評」という形式で、雑誌のどこそこに星を散りばめるように掲載して行きたいと思っています。

また、不定期に「読者のページ」のようなものを設け、読者との意見交換の場を作りたいと考えております。これらの試みが本格的にスタートし、さらに実を結んで行くまでには、しばらく時間が必要でしょうが、少し辛抱しながらお待ちいただきたいと存じます。

そして、私に課せられた最大の課題は、後継者を発掘し、育成することにあると考えております。出来るだけ早く優れた後継者を探しバトンタッチをして行くことが、会にとっても私自身にとっても、望ましいことであることは間違いありませんが、焦って事を急いで、今まで本誌が積み重ねて来た評価を失墜させ、読者の皆様の期待を裏切るような事態は絶対に避けなければなりませんので、後継者の発掘、育成について弛まぬ努力を継続しつつも、自分自身、そして周囲を注意深く観察しながら、自分が退くための機が熟するのを待ちたいと思います。

私が考える後継者の条件とは、実績とか、性格といったことより、まず、人間、芸術、社会を広くそして深く洞察出来る精神を持っていることです。ものごとを広く、深く見つめるためには、様々なものについて飽くなき好奇心を抱く開いた心と、自己を凝視し続ける内面的な厳しさが必要でしょう。優れた物書きや芸術家は、常に自分の心の中に《アンチ自分》を同居させています。「彼奴らは軽薄で私の考えを

理解する能力がない。いや、お前の考えが浅いからあの人達を説得できないのでは？」。そのような内なる心の葛藤は、他人からは、なかなか窺い知ることができないものでしょう。しかし、不十分な自己省察は、自分の思い込みを安易に正当化した浅い人間観察、見当違いな事実認識となって表れてしまうものです。人は過ち、失敗を繰り返すものですが、絶えずそれを自省し自分自身を見つめ直すことによって、絶えず進化して行くことが出来ます。私は、そのような後継者を見つけたいと願っております。



## 新編集長からのご挨拶

橘川 琢

本誌を発行する日本音楽舞踊会議は、1962年創立で、2012年に50周年という節目を迎えます。本誌も同じ星霜を経ており、音楽史の証言者として48年在り続けました。本号は通巻519号にあたります。

月刊「音楽の世界」には「音楽家が自ら作るマンスリージャーナル」というテーマ・スローガンがあります。これは、旧くからある有名な言葉『自明灯（じみょうとう）』…自ら明り・灯し火をつけ、歩み続ける気概そのものではないかと思えます。48年のバックナンバーをひもときますと、時代の風が灯を煽り派手に言論の炎を燃やす時もありました。高度な研究と身近な実践の記事が両輪となり、毎月一步一步前進している時もありました。そして全ての時代を通じて、多くの読者にとって孤独な創造活動・芸術活動の行く手を照らす大切な明りであったのではないかと拝察いたします。

受け継がれてきたこの明りはいま、自らの足元や来し方行く末を照らすのみならず、ともに暗闇の中を航海する同時代の仲間を励まし勇気づける、他人のための明りとしての役割も必要ではないかと考えます。この不況の中、自らの灯もいつ消えてもおかしくない中、これは決して楽なことではありません。それでも歯を食いしばって音楽を、芸術を、感動の記録を現場から次代に伝えようとする姿勢こそが、暗闇の中やはり次世代に文化を伝えようと遠くを旅する誰かの、旅を続ける気力になるかもしれません。我々もまた、その人々の航海の灯を遠くに見つつ、決して孤独な旅路ではないことを知り勇気づけられます。

ここで、この月刊誌の歴史の灯を絶やすまいと、約十年続けて来られた本誌前編集長、野口剛夫氏の熱意と、月刊誌存続に対する功績に触れずにいられません。長い編集長時代の初期、印刷費の問題から現在のサイズへと変更し、存続を可能にしたこと。多くの独創的な特集を組みながらついに500号を迎えたこと。この記念すべき500号の紙面上に展開されたこれまでの「音楽の世界」誌の特集等の一覧は、我々に、音楽史の遠近図とともにこの歴史ある月刊誌を刊行していることの矜持、続ける意欲を与えました。野口前編集長が、日本音楽舞踊会議の事務所にあります膨大なバックナンバーを一冊一冊丁寧に手にとり、これまでの軌跡と印象的な文章の引用を熱心に打ち込んでいらっしやった姿は、今でも忘れられません。

この度中島洋一新編集長のもと、新編集体制が発足いたしました。毎回編集会議のスケジュールを公開し、編集部員でない一般会員でも興味があったら自由に会議に顔を出せるようになる希望を打ち出すなど、より衆知を集めて熱気・活気ある編集体制を確立しようとしております。言論活動もまた音楽活動と同じく、喜怒哀楽を共にした全人的な関わり、人の交歓の中でこそ活気を持ってくるのではないかと思います。これからも小さくとも重みのある月刊誌の灯を皆様と守り、未来に向かい歩んでゆきたいと存じます。

ご指導・ご鞭撻のほど、どうかよろしくお願い申し上げます。

(きつかわ・みがく 本会 機関誌編集部長・副編集長)

# 音楽現代

6月号 定価 840円

- ♪特集 作曲家ベーシックシリーズ5  
チャイコフスキー&ドヴォルザークの  
交響曲・協奏曲
- ♪特別企画 生誕100年記念  
サミュエル・バーバーとアメリカ作曲界
- ♪カラー口絵  
びわ湖ホール・神奈川県民ホール・東京二期会「ラ・ボエーム」  
第2回高松国際ピアノコンクール  
スタニスラフ・スクロヴァチェフスキノ読  
売日本交響楽団
- ♪連載 ショパン生誕200年記念  
「ショパンのポーランド」第3回
- ♪インタビュー  
シルヴァン・カンブルラン、  
マルコム・マルティノー、  
金澤希伊子、深山尚久、他

〒111-0054 東京都台東区鳥越 2-11-11  
TOMYビル 3F  
芸術現代社 TEL3861-2159

# Fresh concert CMDJ 210

## ～より豊かな音楽の未来をめざして～ 報告

報告者：コンサート実行委員長：中島 洋一

第8回 『Fresh Concert CMDJ2010 ～より豊かな音楽の未来をめざして～』が、4月9日（金）午後6時半より、すみだトリフォニー（小）ホールにて開催されました。今年は金管五重奏の参加があったこともあり、11組16人、ピアノ伴奏者を入れると22人がステージに立ち、出演者の人数としては過去最高でした。

来場者数は、185人で、目標にしていた200人に少し届きませんでした。

今年の『Fresh Concert』は数人の会員の方々が協力して、参加者を推薦してくれましたので、例年よりは順調に参加者が集まりましたが、プログラムの校正ミスなど、いくつかの失敗もありました。プログラムの校正は、ただ大勢で行ったり、校正期間を長くしさえすれば、ミスを一掃できるという訳ではないようです。むしろ、参加者当事者に校正中であることを電話等で連絡し、自分の演目だけでもしっかり目を通してもらうようにした方が、基本的なミスは避けられるかもしれません。

また、当日は実行委員が私一人になり、しかも、新聞社の取材等も重なり、出演者に対するケアが十分出来なかったこと、また司会者が、演奏者の名前と曲目を間違っ  
て紹介するなどのミスもあり、今後に向けての反省点を残しました。しかし、昨年問題になった出演者のマナーなどは、今年はよかったようですし、なによりも演奏が粒揃いでバラツキが少なく、最初から最後までよい演奏が続いたことが一番の収穫でした。また、今回は主演者以外に、6人のピアニストが歌の伴奏を担当しましたが、総じて伴奏者の演奏水準も高く、よく歌手を音楽的に支えていたと思います。

以下に、各演奏について寸評を記載しました。これは、私が個人的に気づいたこと、感じたことを書いたものですので、他の人が書けば、また違ったものになったと思います。

どうか、気楽にお読みいただきたいと存じます。

なお、演奏写真は、グラビアページに掲載されておりますので、そちらも併せてご覧ください。

### ①岡田 真実（ソプラノ） ピアノ伴奏：稲葉 千恵

フォーレ 「リディア」作品4-2、「ネル」作品18-1、「薔薇」作品51-4

歌い始めは少し緊張気味で、最初の「リディア」ではフレーズの終わりの長い音で、時には息が苦しくなり短めになってしまう感じを受けましたが、歌い進むにつれ、歌う喜びが聴き手に心地よく伝わってくるようになりました。破綻もなく美しい歌を聴かせてくれましたが、大きな転調などが入り音楽の局面が変わるとき、もっと変化が出せた方がよいし、詩の区切りで楽譜上に（'）が入っていても、音楽的なフレーズは繋がっているところもありますので、そういう微妙なところまで注意して歌えるようになると、さらにフォーレの歌曲の魅力が引き出せるのではないかと感じました。



## ②小林 萌里 (ピアノ)

バッハ 半音階的幻想曲とフーガ 二短調 BWV 903

しっかりした勉強の成果が出せた、聴き応えのある演奏だったと思います。内声に表れたフーガの主題も隠されることなくしっかりと自己主張出来ていたので、この作品のもつ密度の高い音楽構造がよく聴き取れました。主調でバスのオクターブで主題が出現するあたりからの最後の盛り上がりには、感動を受けました。プレリュードもしっかり演奏していましたが、強弱の変化をつけたところと、あまりつけなかったところがありました。チェンバロでは大きな強弱はつけられないのですが、ピアノはそれが可能ですし、ピアノの表現力を生かしても、この作品の魅力は決して損なわれることはないでしょう。

原楽器を配慮して強弱表現は控えめにするか、強弱表現が可能なピアノの表現力を生かすか、それはバッハの音楽をどのように捉えるかという演奏者の哲学の問題です。

## ③大坪 由衣 (ソプラノ)

ピアノ伴奏：山木 千絵

モーツァルト

歌劇『ドン・ジョヴァンニ』より

“ぶってよ、ぶって、 いとしいマゼット”、“恋人よ、さあこの薬で”

司会者に名前と曲名を間違えて紹介されるという不運がありましたが、悪びれることなく、とても可愛いツェルリーナを歌ってくれました。まだまだ発声も表現面でも成長途上の若さを感じましたが、配役のキャラクターがよく伝わってきました。C音など特に低い音については声が小さくなり、ややキツそうでしたが、高い方の声は、発声が成熟して行くにつれ、さらに磨かれて艶が出てくると思います。演技をつけてドン・ジョヴァンニと二重唱を歌うところなど、観聴きしてみたいものです。

## ④宮下 咲恵 (ソプラノ)

ピアノ伴奏：森田 真帆

フォーレ 『ある日の詩』より 1めぐり逢い 2いつまでも 3さよなら

この演奏は、歌唱、伴奏とも安定感と表現力が抜群で、プロの世界に一步足を踏み入れた人の力量を感じさせるものがありました。発声もムラなく安定性があり、そしてフランス歌曲に必要な陰翳表現などもよく出ており、成熟度の高い演奏だったと思います。

これは、私の感じ方かもしれませんが、あえて、注文をつけるとすれば、「いつまでも」は、もっと感情を強く出した激しい表現をしても良かったように思います。そうすることで、第3曲の「さよなら」との対照性がはっきりして、恋をめぐるドラマともいえるこの歌曲集で、より彫りの深いドラマが描けるのではないかと思います。

## ⑤恵藤 幸子 (ピアノ)

ラヴェル

『夜のガスパール』より 「オンディーヌ」

恵藤さんは3年前にこのコンサートに出演していますが、3年間の研鑽の成果を踏まえ、

ずっと成長した姿を見せてくれました。この曲は近代のピアノ作品の中でも特に高度な演奏技術を要する難曲ですが、小刻に奏される右手の和音、左手で歌い始めるオンディーヌの歌、分散和音で奏させる様々な色合いに変化して行く水の飛沫、その中を漂いながら歌うオンディーヌ、このような詩的な世界が気品高く表現されていたと感じました。

あえて注文すれば、あまり真面目に構えず、もっと余裕をもって楽しみながら演奏すると、さらに良くなると思います。

#### ⑥秋山 来実 (ソプラノ)

ピアノ伴奏：稲葉 千恵

フォーレ “月の光” 作品 46-2、“歌う妖精” 作品 27-2

短めの曲を2曲歌っただけなので、演奏時間の面で損をしたかなという気もしたのですが、少し緊張気味だったものの、深い詩情を控えめな旋律に込めて歌う“月の光”、そして可愛らしくお茶目で滑稽な感じを漂わす“歌う妖精”、この異なった表情を持つ2曲を、美しい歌声でたっぷりと聴かせてくれました。さらなる注文をすると、フランス歌曲には朗々と歌うだけではなく、呟くようなPP、そしてイタズラっぽく耳打ちするようなPPなどがあります。そういう個所は歌いすぎではいけませんし、また、ただ小さい声で歌えばよいというものでもありません。詩の内容をよく理解し、その場所に相応しい歌い方が出来るようになると、ずっと表現が深まって行くと思います。

#### ⑦くにたち・プラス5 (金管五重奏団)

角 雅晃(Tp.)／伊藤 緑(Tp.)／齋藤 嵩之(Horn)／永山 千尋(Tb.)／三木 博士(Tuba)

エワイゼン 「フロストファイア」

過去に、トランペット・ソロでの出演がありましたが、金管楽器によるアンサンブルでの出演は今回が初めてです。なかなか難しい曲ですが、学生らしい若さの溢れる演奏だったと思います。もちろん、アタックが揃わず少しズレたり、速いパッセージでややしどろもどろになったりした個所も部分的にはありましたが、全体的にみて、澁刺としていながらも、ただ若さにまかせてただ走りまкруるというのではなく、テンポや、ボリューム、音色のバランスなどにも気をつかい、中々息の合った演奏でした。卒業してしまうと、なかなか一緒に活動することが難しくなるかもしれませんが、メンバーの何人かでも残り、さらに磨かれたアンサンブルを聴かせて欲しいと思います。

#### ⑧清野 友香莉 (ソプラノ)

ピアノ伴奏：藤川 志保

R・シュトラウス 歌劇『ナクソス島のアリアドネ』より「偉大なる王女様」

今回を入れて8回開かれたフレッシュコンサートにおいて、リヒャルト・シュトラウスを歌ったのは、清野さんが初めてです。高度なコロラトゥーラの技術とともによく透る声も要求され、難度の高い歌唱表現力を必要とする曲ですが、緊張しすぎることもなく、笑顔をみせながら楽しそうに歌っていました。コロラトゥーラの技術に重きをおいた部分と、整った

旋律をたっぷりと歌う部分がスムーズに連続し、その聴き手を飽きさせない澁刺とした歌唱から、この人の豊かな将来性を感じました。近未来において、再び本会のコンサートのステージに立ち、さらに成長した姿を披露してもらいたいものと希望します。

⑨秀川 みずえ (ヴァイオリン) / 鈴木 菜穂子 (ピアノ)

グリーグ ヴァイオリンソナタ 3 番 ハ短調 作品 45 より 2、3 楽章

秀川みずえさんと鈴木菜穂子さんによるデュオは、グリーグの音楽の魅力をよく引き出しており、改めて第一楽章を含め、全曲通した演奏を聴いてみたいと思わせる優れた演奏でした。第二楽章の冒頭にピアノの高音域で奏させるコラール風の和音も透明感があり美しかったし、微妙なテンポの変化、強弱の変化で作品の表情をよく出していました。豊かな音色感を感じさせる演奏でしたが、同時に作品の楽曲構成もしっかり把握しており、歌うところは艶やかに歌い、激しさが必要なところは激しく表現するなど、各セクションの対比も見事で、音楽的なメリハリがあり、聴き手を飽きさせませんでした。ヴァイオリンとピアノの音のバランスも良かったのですが、ff の部分で、ヴァイオリンが、ピアノに隠され気味になるところが少しありました。

メッセージにも書かれているように、気のあった同志で長くコンビを組んで、さらによりよい音楽を聴かせて欲しいと思います。

⑩大久保 雅代 (ソプラノ)

ピアノ伴奏：白取 晃司

ヴェルディ 歌劇『リゴレット』より “麗しき御名”

この曲は『リゴレット』の中で唯一のソプラノのアリアですが、声の質も容姿もマントヴァ公爵に対して一途に恋心を抱く娘にぴったりだったと思います。難しいコロラトゥーラの技術を要する曲で、しっかり勉強していないと音程が曖昧で不正確になりがちな細かい音符も、美しく正確に歌っておりましたし、特に高音域の声の響きが清純な娘役らしく清らかな透明感があり、魅力的でした。大久保雅代さんは3年ほど前に、本会のオペラコンサートに出演したことがありましたが、その時に比べ、声量、歌唱力の両方ともずっと成長しており、嬉しく思いました。是非、また本会のコンサートのステージに立っていただきたいと思えます。

⑪村松 恒矢 (バリトン)

ピアノ伴奏：中澤 頼子

モーツァルト 歌劇『ドン ジョヴァンニ』より “酒で頭が熱くなるまで”

同 歌劇『フィガロの結婚より』より “もう訴訟に勝つただと?”

村松恒矢君の演奏は、最後のトリに相応しい堂々とした演奏でした。始めに歌った『ドン ジョヴァンニ』の通称「シャンペン」のアリアは、張りのある声で、陽気でテンポ感のある歌い方をし、聴衆を魅了しました。『フィガロの結婚』のアリアの、アレグロ・アッサイの部分では、「セザンヌをフィガロなんかやるものか」という伯爵の邪な情熱がなかなか

よく表現されていきました。最後の方で、高い上のF#やGの音が、頻繁に出現するヴァージョンで歌っていましたが、バリトンにとって高めの音域でも、十分な対応力があることを覗かせました。ピアノはメリハリが効いた切れの良い演奏でしたが、フィガロでは、時々主役の声を押しつけて前に出す傾向がみられました。

村松君は、将来外国のオペラの舞台に立つことを夢見ているようですが、夢が叶うように一層精進してもらいたいと思います。

終演後、「京丸」で打ち上げが開かれました。終演時刻が遅かったため、参加者は多くありませんでしたが、参加者、会員が気さくに楽しく語り合い、良い時間を過ごせたと思います。

この企画を8年連続で続けることが出来たのは、関係者の方々の温かい協力のお陰と感謝しておりますが、頑張っ、来年以降もこの企画を続けて行こうと決意を新たにしております。

(なかじま・よういち 本誌編集長)



## 「二つのドアの向こう・・・フレッシュコンサート2010 音楽監督より出演者に向けて」

橘川 琢

この度は、「フレッシュコンサート2010」ご出演、おめでとうございます。皆様のこれからの長いキャリアのスタートをご一緒できましたこと、音楽監督・舞台監督として大変嬉しく思います。これから様々な舞台に巣立たれる皆様に、最後に何かお役に立てることはないかと考え、様々な現場での舞台監督の経験から、二つのドアを意識することをお伝えしたいと思いました。

### ■ステージ入口ドア・・・舞台上

今回、一裏方として、音楽監督・舞台監督として、このホールにおける皆様の音楽の聴こえ方、響き方、伝わり方についてお一人お一人に合わせたご提案をさせていただきました。どのホールでもあるかもしれませんが、同じ表現なのに舞台上の上での立ち位置一つで客席への伝わり方がまるで変わってしまう怖さがあります。皆様が本日まで培ってきた音楽を聴かせて頂きながら、その良さを最大限に生かしつつ、ホールの音響効果を味方につけてより一層舞台上で輝けるようにという一心で、短い時間ですが様々なことをお伝えいたしました。

また、本番前にホールスタッフや音楽監督・舞台監督を前にしたゲネラル・プローペ（舞

台上総稽古)・音出しは、これまでの練習において信頼できるパートナーや先生と相談して作って来られた音楽が本番舞台上で見られることになる、(多くの場合) 最初の機会となります。自分達の創って来られた音楽や表現をこれから本番の舞台上でお客様にお伝えする前に、この舞台やホールに慣れた人間の耳にどう聞こえるのか、どう通じているか、さらに音楽を通して伝えたい気持ちがより受け取りやすく聞こえているか、音楽上の表現と音響の乖離から大きくマイナスに聴こえるようなところはないか・・・今回も舞台監督・音楽監督として客席から様々な角度で確認させていただきました。

その結果、僭越ではございますが、今回も聴こえたままを伝えながら、その場で修正できる範囲でより良くなるよう、受け入れやすいこと、もしかしたら受け入れにくいかもしれないこと全て含め全力で皆様にフィードバックしました。今回限りの、個々の演奏の部分的な出来不出来の確認のためだけではなく、今後違うホールの舞台上で(主観・客観の一致や違いを含めた) 自己確認を行う際の、何らかの参考になれば幸いです。

#### ■ロビー・ホワイエと舞台裏のドア・・・お客様へのドア

今回、集合写真を撮影した時、皆様への諸注意としまして「皆様が今回ご出演される演奏会は、不特定多数の方がお見えになる『演奏会』であって、身内を中心とした『発表会』ではない。音楽以外にも、立ち振る舞いの全てを厳しく見られる場であることを意識して下さい。」といった趣旨のことをお伝えしました。

特に、演奏会という場の空気に慣れてきますと、楽屋口から入り、館内を自由に行き来できる立場から、ついお客様のいらっしゃる表空間とバックスペースの違い・怖さを意識せずに歩いてしまいがちです。ましてや「発表会」という意識ですと、仲間内だけの閉鎖的な振る舞いがロビーやホワイエ・客席で度が過ぎて出てしまい、その人にとって響感を買うだけでは済まない事態になることも残念ながらあります。

そうした悲しい事例に接する度に、衣装(衣裳)を着ている時は当然ですが平服でいる時も、演奏会の会場にいるときはパブリックスペース(公共の場)にいるのだという厳しい眼と意識を常に自分の内側に持つことが、少々息苦しいかもしれませんが必要なことなのかなと感じてしまいます。

こうしたことを学ぶのは難しいかとは思いますが、例えば自分の敬愛する先生・師匠が、自身の演奏会のロビーにおいてどのようにお話しされているのか、お客様・スタッフなどにどのように感謝をお伝えしているか。また、自身の演奏会以外の時に、お客様としてどうご来場されているのか、意識して色々ご覧になることが大変貴重な勉強になるような気がいたします。音楽以外でも、長年第一線でご活躍されている先生の後ろ姿から教わることは多いかと思えます。

## ■最後に

フレッシュコンサートに限らず色々な演奏会で、開演前、受付やロビーにおいてお客様をお出迎えいたしておりますと、初めて会う我々スタッフに親しげに色々語って下さるお客様がいらっしゃいます。お伺いしておりますと、この一回の演奏会にかける特別な思い、時には数年に一度のコンサートが今日、というお話をされることがあります。そういう方々にお会いするたび、この一回は特別に思い出に残る一回であってほしいといつも思わずにはられません。これは我々が聴き手になった時もそうではないでしょうか。どんなコンサートを聴きに行くにせよ、力をセーブした「数多くのなかの一回」ではなく全力の「特別な一回」を見てみたいものです。

経験を積み多くの演奏会に出演し関わるようになりますと、お客様の感じるこの一回一回の重みを、恐ろしいことに毎回の多忙の中で忘れてしまいかねません。若いこと、フレッシュであるということは、演奏会を貴重な「特別な一回」として意識できる新鮮な気持ちにあるのではないかと思います。このフレッシュコンサートが、皆様のこれからの長いキャリアの中、舞台に不慣れで緊張し続けたけれど全身で「特別な一回」を見せようとしていた原風景として、また、「常に新鮮な、全力の音楽を差し出し続けたい！」と思う気持ちの原点の一つになって頂けましたら、我々スタッフにとりましてこんなに嬉しいことはありません。

そして我々も至らぬところは多くあれど、今後とも「数多くのなかの一回」ではなく、常に「特別な一回」のつもりで皆様をお迎えし、一緒に新鮮な気持ちで演奏会を創りたい、質を高めたい、裏方を務めたいと思います。

最後に今一度、皆様のこれからの輝かしい未来をお祈りし、また心から応援いたしております。

(きつかわ・みがく 「CMDJフレッシュコンサート 2010」 音楽監督・舞台監督)



## 作曲部会公演「ソロと室内楽への誘い」～風薫る5月に

報告：中島 洋一

さる5月9日（日）15:30から すみだトリフォニー（小）ホールにおいて、本会作曲部会公演、「ソロと室内楽への誘い」が開演された。日本音楽舞踊会議作曲部会の作品発表会らしく、素朴で親しみ易い作品から、やや難解でとっつきにくい作品まで、様々な傾向の作品が演奏されたが、総体的にみて演奏水準も高く、十分に耳を楽しませてくれる音楽会となった。以下は、私が個人的に感じたことをメモのように綴ったものであるが、私個人の主観が入った寸評ということを承知の上で目を通していただきたい。

小平 時之助：バイオリンとピアノのための詩曲 I・II

ヴァイオリン：北川 靖子／ピアノ：東山 洗雅

ロ短調の沈鬱な半音階的主題ではじまる第一曲には、特に心を打たれた。楽想が展開されていっても、戦いで亡くなった友人たちの声が耳から離れないように、主題は表情をかえて何度も戻ってくる。構成的にもしっかりしていて、再演を望みたくなる説得力を持つ作品であった。第2曲は、ピアノの重いソロで始まり、ヴァイオリンがトリルで応答する。途中で民族音楽を想起させる旋律が出現する。今回は、この二曲を昔から故人を良く知る北川靖子たちが演奏したが、表現力、技術力ともに素晴らしく、亡き友たちへの鎮魂歌として書いた故人の心がしみ通って来るような演奏であった。

大和 實：大和ミエコ童謡集「さくら さくら」より（詩：大和ミエ子）

「こぶしの花」（初演）、「冬の鳥」（初演）、「榛名讃歌」（初演）

メゾ・ソプラノ：湯川 亜也子／ピアノ：森田真帆

憂鬱な曲想の「冬の鳥」を真ん中に挟んで、叙情性溢れる三曲の歌曲が演奏された。作曲者の大和實は、作曲上で大胆な冒険が出来る人ではないかもしれない。しかし、曲を書くに当たって、自分で何度も繰り返し歌唱し、伴奏部も響きが気に入るまで推敲し、自分自身で心から納得できる音しか書かないし、書けない人である。その歩みはゆっくりだが、詩の扱い方、和声法、転調法など少しずつ進歩して来ており、作品の表現力を増している。

三曲とも作曲者の誠実な創作姿勢がよく表れた作品だが、湯川亜也子の歌唱、森田真帆のピアノ伴奏はともによく磨かれており、初めから終わりまで、音楽を聴くことの幸福感に浸ることが出来た。

穴原 雅己：ピアノのための3つの小品（初演）

1. プレリユード、2. 音興の時、3. バガテル /ピアノ独奏：浜尾 夕美



20年以上前に書いた作品ということだが、一般の人たちには耳に慣れた音がして聴きやすかったかもしれない。しかし、こういう言法の作品なら、西洋古典の作曲家達が、より高い音楽的密度を持つ優れた作品を数多く残している。これでは古典音楽の模倣の域をまったく出していない。何も風変わりな試みをするのを奨めているわけではない。書き慣れた言法に安易に頼るのではなく、もっと苦しみながらも、自分の世界を切り開いて行って欲しいと願うのだ。なお、浜尾夕美の演奏は秀逸だった。

#### 高橋 通：5月の青い風(初演)

～オーボエ、コール・アングレ、ファゴット、そして箏のための音楽

オーボエ：前澤 祐輔 / オーボエ&コール・アングレ：刈込 佐奈恵

ファゴット：高橋 健 / 箏：高橋 澄江

この作品で作曲者の意図したところを要約すると、西洋音階の旋律、現代の無調の旋律、西アジア、中央アジアの旋律、中国や日本の旋律、それらを融合して音楽の源流に思いを馳せるということらしいが、モチーフの展開法、規則性のある拍節構造など、やはり西洋が中心に存在するのを感じた。しかし、箏の音色と、ダブルリード系の楽器の音色は、時には溶けあい、時にはそれぞれが自己を主張して、なかなか興味深い音楽を紡いでいた。

途中でやや冗長な感じもしたが、箏のソロの部分なども楽しめた。殆どの部分で調性を感じさせたが、それは箏の調弦の制約があつてのことかもしれない。しかし、この音楽には調性の骨格がかなり明確に残っているこういう書き方の方が合っているような気がした。

#### ロクリアン正岡：組曲「鍵盤の上を走る四足の爬虫類」

— 2台のピアノによる — (1987/改訂2010)

ピアノ：瀬川 由馬 / ピアノ：野口 裕紀

組曲は、1)無垢なる爬虫類、2)標本から出た爬虫類、3)猪突猛進する爬虫類、4)蓄電する爬虫類、5)進化する爬虫類の5曲からなるが、各曲が演奏される前に客席の後方から、作曲者が大音声で曲名を叫ぶ。最初の曲は白鍵だけで作られており、曲番が増す毎に音が増えて行くようだ。タイトルの付け方など、サティを彷彿させるような、ウィットとユーモアがあり、作曲者の大音声もパフォーマンスの一部に含まれるというユニークなアイデアで作られているようなのだが、ゼスチャーだけが大袈裟で、意匠倒れの感が拭えず、私には音楽的な魅力というものがあまり感じられなかった。作曲者自身は型破りで、人間的に魅力的なところがあるのだが...

#### 高橋 雅光：高橋一仁の童謡詩によるうた (詩：高橋一仁)

「おちばのおはか」、「ゆうえんちのすなば」、「のんび」、「マスノスケ」

ソプラノ：浦 富美 / ピアノ：坂田 晴美

発表された4曲の童謡はいずれも素朴で親しみ易い音楽ではあるが、あまりドミナント→トニックのような単純な和音進行を多用しすぎないで、もう少しカラフルな響きを挟んでもよいのではないかという気もした。例えば良く知られている中田喜直の「夏の思い出」では終わりの方の“はるかな尾瀬”の歌詞の“尾瀬”の部分で、通常はⅡ調の減七が使われるべきところに、長調の導七の和音を用い、当時としては非常に新鮮な印象を与えた。私個人は4曲のうちでは「のんび」が一番楽しく聴けた。ソプラノの浦富美と伴奏の坂田晴美は、これらの作品の曲想を生かして演奏していたと感じた。

**浅香 満 : ビオラとピアノのための夜想曲／ビオラとピアノのためのソナタ**  
**ヴィオラ : 岡 さおり／ピアノ : 植田 さや香**

しっとりとした深い叙情性を感じさせる夜想曲と表現主義的な傾向を感じさせるソナタの2曲が演奏された。ヴィオラの岡さおりは、C線をひいても音が荒くなることなく、低音から高音まで豊かな響きを奏でて、作品の叙情性を引き出していた。二人の演奏者はソナタにおいては、前曲とは異なる荒々しい表現も聴かせてくれたが、二曲のうちのどちらを選ぶかと問われれば、私は浅香満特有のロマンチックな叙情性が色濃く表れている夜想曲の方を選ぶだろう。

ソナタからはやや散漫さが感じられたのに対して、夜想曲の方は太い表現の一貫性を感じたからだ。岡さおりもピアノの植田さや香もなかなかの好演だった。

**桑原 洋明 : 「道行蝶吹雪」(詩歌 : 三世 桜田治助)**  
**歌と語り : 前田 千秋 / Fl. : 渡辺 多真美**  
**語り : 桑原 洋明 / Pf. : すずき みゆき**

歌舞伎や人形浄瑠璃でお馴染みの道行きの西洋楽器版といえるような作品。ピアノやフルートの用い方はややかしまじい感じもしたが、劇的な状況の変化をよく表現していた。圧巻は歌と語りを担当した前田千秋の表現力の凄さである。専門が声楽家なので歌唱力はもちろんだが、特に語りの部分において聴く者を圧倒するような迫力があつた。作品も演奏も十分楽しめる出来映えだったが、惜しかったのは、作曲家自身が担当した語りの部分である。歌舞伎にも人形浄瑠璃にも造詣が深いと思われる作曲者の語り口はなかなかの名調子だったが、専門の声楽家と比べると声量が違いすぎた。無伴奏の時はまだしも、背景に楽器の音がかざると、声はかき消され、言葉が殆ど聞き取れなくなる。折角の作品なのだから、再演する際には、この点に留意して欲しい。

発表された作品の多くは今回が初演だったが、この種のコンサートとしてはお客の入りも良く、また聴衆のマナーもよく、熱心に演奏に聴き入っていた。このコンサートを成功させた、実行委員長の大和實氏をはじめとする関係者の努力に、感謝の拍手を送りたいと思う。



## 1. 会と会員のスケジュール

### 6 月

- 7日(月) 定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所 19:00~21:00】
- 7日(月) 深沢亮子 翔の会 公開レッスン【トモノホール10:00~13:00 3,000円】
- 12日(土) 芝田貞子・嶋田美佐子・高橋順子「平和のためのコンサート」  
ゲスト：橋爪 文(詩人) 水野与旨久(マリンバ) 講演「広島からの出発」ほか  
【牛込笹笥区民ホール、14:00~ 2,200円】
- 12日(土) 宮本光子「加賀の灯り in 妙成寺 伝える いしかわの 童唄」  
万葉集より：かしまねの 童唄より：おじゃみおふた 他【日蓮宗北陸本山 妙成寺本堂 14:00~ 1,500円(100席限定予約のみ) 問合せ先：宮本光子 TEL 080-3044-8908】
- 13日(日) ピアノ部会試演会【新井宅 10:00~12:00】
- 13日(日) 橋川 琢作曲ほか 「CLAPOPOP!!」曲：橋川 琢 ヴィオラとピアノによる抒情組曲  
《日本の小径》より「瑠璃の雨」ほか【初台スタジオリリカ 14:00開演 2,000円】
- 20日(日) 滝澤三枝子 演奏活動40周年記念 ピアノリサイタル 情熱のスペイン  
グラナドス「スペイン舞曲」より 悲しき舞曲 演奏会用アレグロ 他  
【板橋区立文化会館小ホール 15:00開演(14:30開場) 2,500円(全席自由)】
- 27日(日) ピアノ部会試演会【戸引宅 10:00~12:00】

### 7 月

- 2日(金) 第23回ピアノ部会主催公演 “ショパンに魅せられて”  
【オペラシティ・リサイタルホール18:45開演 一般前売3,000円 当日3,500円】
- 3日(土) 声楽部会主催公演 「歌い継ぐ童謡・愛唱歌コンサート~月によせて~」  
【すみだトリフォニー小ホール 14:00開演(13:30開場)】
- 4日(日) 助川敏弥一邦楽合奏と男声合唱とオーケストラのための「梵」/大月宗明作曲・  
助川敏弥編作【港区メルパルクホール 13:00開演】 問合せ：3-3433-8337
- 4日(日) 芝田貞子「詩と音楽の結晶 ドイツ歌曲コンサート」  
シューベルト：楽に寄す・鱒、メンデルスゾーン：歌の翼に 他  
【かつしかシンフォニーヒルズ・アイリスホール 14:00~ 前売：3,500円 当日：4,000円 チケット販売：シンフォニーヒルズ チケットセンター  
TEL03-5670-2233】
- 4日(日) ピアノ研究会“翔”定期演奏会  
【浜離宮朝日ホール 13:30開演 3,000円 問い合わせ：大山 TEL 044-966-5224】
- 10日(土) 深沢亮子一中村静香さんとの Duo & ソロ コンサート 主催：FSS(フランツ・  
シューベルト・ソサエティ)【日生劇場 ロビーコンサート 14:00~】
- 19日(月・祭) 助川敏弥一歌曲集「薔薇の町」(2009)、ほかピアノ曲  
北海道立南高等学校同窓会記念行事・ソプラノ・高橋照美・ピアノ・上杉春雄

【札幌市モエレ公園ガラスのピラミッドホール 17:00 開演】

- 21日(水) 北川靖子・北川暁子 ソナタの夕べ  
シューベルト:ソナチネ Nr. 1・3、 ベートーヴェン:ソナタ Nr. 9 クロイツェル、  
R. シュトラウス:ソナタ【東京文化会館小ホール 19:00～】

## 8 月

- 7日(土) 橘川 琢作曲「橘川 琢作品個展Ⅳ 2010 夏の國」曲:橘川 琢 詩歌曲「夏の國」  
ほか【西荻窪スタジオベルカント 18:00 開演 前売 3,000 円】

## 9 月

- 22日(水) CMDJ 2010 オペラコンサート【すみだトリフォニー小ホール】(詳細未定)  
30日(木) 深沢亮子リサイタル — シューベルトの夕べ 恵藤久美子さん (violin)、堤  
剛さん(violin cello)をお迎えして【紀尾井ホール 19:00 ～】

## 10月

- 9日(土) 深沢亮子 — コンサート【東金文化会館 14:00 ～】主催:東金文化会館  
18日(月) 20世紀の以降の音楽とその潮流—様々な音楽の風景Ⅶ—【すみだトリフォニ  
小ホール】(詳細未定)  
30日(土) 深沢亮子 — 中村静香さんと (violin) 朝日カルチャーセンター【13:00  
～14:30】

## 11月

- 4日(木) 声楽部会公演・ピアノ部会共催 ～ショパン・シューマン生誕200年記念  
歌曲とピアノの夕べ～(仮称)【すみだトリフォニー小ホール】(詳細未定)  
15日(月) ピアノ研究会“翔” 深沢亮子 公開レッスン  
【コトブキ D. I. センター 10:00 ～13:00】  
19日(金)「第3回フランス歌曲・研究コンサート」【中目黒GTプラザホール 開演 19:00】  
(詳細未定)  
25日(木) 上野優子ピアノリサイタル シリーズ Vol. 1 バーバー:ソナタ第1番作品26 ほか  
【カワイ表参道コンサートサロンパウゼ、19時、一般 3000 円】

## 12月

- 2日(木) CMDJ 若い翼によるコンサート3  
【すみだトリフォニー小ホール 19:00 開演】(詳細未定) 出演者募集中  
3日(金) 深沢亮子 日唄協会 クリスマス会 Schubert ピアノ5重奏曲「鱒」他  
出演:深沢亮子と若手ソリスト達【ホテル・オークラ 18:00～予定】  
15日(水) 深沢亮子—2台ピアノのコンサート 野原みどりさんと  
主催:モーツァルト協会【東京文化会館 18:45～】  
20日(月) 日本音楽舞踊会議主催:ピアノとヴァイオリンとチェロの夕べ  
出演:深沢亮子、恵藤久美子、安田謙一郎 曲:モーツァルト:トリオ第2番  
K496 他【音楽の友ホール 19:00 開演 4,500 円】

2011年

1月

10日(月・祝) 声楽部会主催公演「2011年新春に歌う」(仮称) (詳細未定)  
【すみだトリフォニー小ホール(昼間公演)】

4月

8日(金) フレッシュコンサート2011【すみだトリフォニー小ホール】(詳細未定)

5月

11日(水) 作曲部会コンサート【すみだトリフォニー小ホール】(詳細未定)

☆\*+★+\*☆\*+★+\*☆\*+★+\*☆\*+★+\*☆\*+★+\*☆\*+★+\*☆\*+★+\*☆\*+★

## 2. 新入会員紹介

笠原 たか(かさはら・たか ソプラノ) 声楽部会 会員

此の度は深澤亮子先生の御紹介で会員に加わせて頂きましたソプラノの笠原たかと申します。深澤先生との御縁は、先生のコンサートのあと何の面識もなかったにもかかわらず私が楽屋をたずね「先生のピアノを是非子供達へ聞かせてあげてください。」とお願ひしたことに始まります。その後県立小児医療センターでのロビーコンサートが実現し、入院中の子供達(ベットに横になったままロビーに出てきた子もいました)や関係者に多くの感動を残して下さいました。

私は常々どのようにしたら“自分が素晴らしいと感じている音楽”を他の人たちと分かちあえるかということを考え、又悩んでいます。自分の練習に明け暮れる毎日だけでは何か欠けているような、又声をかけた知人のみが聞きに来てくれ、それが繰り返されてゆくコンサートもそれでよいのか? まだ答えは見つかりませんが深澤先生が与えてくださったような音楽のあり方がまだ他の形でもあるような気がして模索する毎日です。地元の滋賀県ではクラシック音楽の聴衆を開拓すること、聴衆を育てること、音楽の底辺を広げるため等で地道な努力をしていますが、音舞会では私の音楽の世界を広げさせていただきたく、又お勉強もしてゆきたいと思っておりますのでどうぞ宜しくお願ひ申し上げます。



福田 礼美(ふくだ・ひろみ ソプラノ) 声楽部会 会員

この度入会をさせていただきました福田礼美と申します。入会させていただき、ありがとうございます。



推薦してくださいました中島洋一先生、そして、当会入会への道を開いてくださり、日ごろご指導を賜っております秋山理恵先生両氏には、重ねてお礼を申し上げます。

当会におきましては、音楽を通じて、たくさんの方々と出会える喜び、心の糧を得ることのできる素晴らしさなど、多くの知識と経験を得ることのできる機会を与えてくださったことに、大変感謝しております。

これからは、当会の活動を通じて、自分自身の研鑽を積みつつ、素晴らしい音楽の世界の普及へのお手伝いをさせていただきたく所存です。

諸先生方、諸先輩方、どうぞよろしくお願い申し上げます。」

### 吉水 知草（よしみず・ちぐさ ソプラノ） 声楽部会 会員

この度は、正会員にご推薦をいただき誠にありがとうございました。

フレッシュコンサートをはじめ演奏活動の貴重な機会をお与えいただき、音楽文化の発展という趣旨に参加させていただけるのは大変にありがたく、光栄に存じます。

これまで学んでまいりました、フランスや日本の歌曲を中心に一層の研鑽を積み、先生方のご高評を仰ぎながら学びを進めてまいりたいと思います。今後とも、何卒ご指導賜りますよう宜しくお願い申し上げます。



### 中山 弘一（なかやま・こういち バリトン） 声楽部会 青年会員

この度、日本音楽舞踊会議青年会員として入会を承認いただきまして、誠に有難う御座います。

推薦いただきました秋山先生を始め、才能ある人材の方々と共に学ばせて頂けることを心より光栄に思います。

研究員の立場としては、2009年「フレッシュコンサート」、「オペラコンサート『愛の喜びと悲しみ』～フランスオペラとイタリアオペラの世界」に出演させて頂きまして、共演者様方を始め関係者の皆様から、沢山のことを学ばせていただきました。

私自身規模は小さいですが、「神奈川ミュージカル協会」という主に横浜を中心として活動している団体に所属しておりまして、小さい子供からお年寄りまでの横浜市民とプロのミュージカル歌手やオペラ歌手を交えた演奏会に出演しております。マイフェアレディをはじめ、大学では中々学べないレパートリー等の経験が生かせればと



思っております。

まだまだ未熟では御座いますが、精進して参りますのでご指導ご鞭撻のほど、どうぞ宜しく御願ひ致します。

#### 上埜 マユミ (うへの・まゆみ ピアノ) ピアノ部会 青年会員

私、上埜マユミは「フレッシュ・コンサート」や「若い翼によるCMDJコンサート」に出演させて頂いてから研究員となっていました。今年、青年会員になり、演奏会やレクチャーに参加して多くの経験を積んでいけたらと考えています。また音楽に携わる同年代の方たちと交流を持ち、活動を通して音楽を理解する力を身につけたいと思っています。会員の皆様どうぞよろしく御願ひ致します。



#### 小木曾 実奈 (こぎそ・みな ソプラノ) 声楽部会 青年会員

この度、日本音楽舞踊会議の青年会員になりまして、大変嬉しく思います。同団体主催のコンサートには以前2回出演をさせて頂いたのですが、幅広い取り組みと著名な先生方によるバック体制が魅力的であると感じます。

年に一度フランス歌曲のコンサートも開かれており、例年私の先輩方も多く出演されております。益々の活動領域を広げ、フランス歌曲を始め、幅広い音楽の普及にこれからもご支援頂きたいと希望致しますし、一会員として私もまだまだ余力ではございますがご協力させて頂ければ、と思っております。



#### 佐々木 寿子 (ささき・ひさこ ソプラノ) 声楽部会 青年会員

私が初めてこちらの会に出させて頂いたのが、一昨年のオペラ「ヘンゼルとグレーテル」でした。音楽を様々な方々に広く知ってほしいとの中島先生始め会員の皆さんの情熱に圧倒されたのを覚えています。今後は自分の専攻であるフランス歌曲はもちろんの事、様々な分野の音楽に触れながら、よりたくさんの方々に音楽の素晴らしさを伝えていけるよう、努力して参りたいと思います。



☆\*+★\*\*☆\*+★\*\*☆\*+★\*\*☆\*+★\*\*☆\*+★\*\*☆\*+★\*\*☆\*+★



### 3. 楽譜出版部より

楽譜出版部が出来て新しい出版を初めています。それに伴い、既に出版済の楽譜の在庫確認、価格改正を致しましたのでご報告します。(楽譜出版部長 高橋雅光)

#### 日本音楽舞踊会議 発行中の楽譜

助川敏弥：KOMORIUTA 作品73 (1986年)

(東北地方に伝わる子守唄を主題としたピアノ曲) A4版9頁 1,260円

ピアノ曲集「ひえつきぶし」(2002年)(東北民謡を主題とした作品)

Lacrimosa「ちいさき たましいの ために」

四手連弾「風の遊び」

A4版19頁 1,680円

歌曲集「白く光れり」向山房枝詩(1996年)

(「ゆうやみ」「ゆらゆらと」「すずしさを」「ひさびさに」「つけしみに」)

A4版17頁 2,100円

歌曲集「ガラスの花束」立原えりか詩(1976年)

(「陽春」「光りの矢」「ムラサキイロの少年」「親指姫」「秋のままごと」)

A4版25頁 2,940円

歌曲集「夕顔」金子みすず詩(1999年)

(「夕顔」「土の草」「みそはぎ」「草原の夜」「だれがほんとを」)

A4版13頁 1,680円

高橋雅光：どんぐりっこのメロディー

宮田滋子詩による「おかあさんといっしょにうたう、あたらしい童謡曲集」

B5版27頁 2,100円

中島克磨：「モスクワ」ピアノのための詩曲 Poema"Moskva" for piano

A4版8頁 1,575円

木幡由美子：「トッカータ」ピアノのために "TOCCATA" for piano

A4版8頁 1,260円

北条直彦：「ピアノのためのヴィジョン」 Vision for piano

A4版7頁 1,260円

黒髪芳光：「こどもの祭りⅡ」ピアノのための四手連弾曲集

(バイエル・メトードローズ併用)

A4版20頁 2,100円

小平時之助：歌曲集「北の国から」(「木地山ぼっこ」「ほしがき」他5曲)

A4版14頁 1,890円

金籐 豊：「ピアノのためのトッカータ」 Toccata—interactive for piano

A4版16頁 1,890円

西山淑子：「金子みすゞの詩による童謡集」

A4版51頁 3,150円

\*お求めは日本音楽舞踊会議まで、郵便振替用紙にご注文の曲名をお書きの上ご送金ください。

日本音楽舞踊会議出版局

## 編集後記

本会の重点コンサートの一つである『Fresh Concert CMDJ2010』が終わり、一息つけると思っていたら、私自身の不注意から転倒し、それもおかしな転び方をしたためか、腰の骨を折ってしまった。第二腰椎圧迫骨折ということで、しばらくは、腰にコルセットを装着して過ごさなければならない。

しかも、4月から編集長に任命され、コンサートや研究会の企画などで忙しい私が、そのような大任を担うことが出来るのか、大いに不安だったが、会のみなさんが気遣って、献身的に協力してくれるので大いに感激し、みんながこれだけやる気になっているのだから、必ず乗り越えられるだろうと、いまは、不安が確信に変わって来ている。困難な状況に追い込まれるほど、人も組織も本当の力が見えてくる。みんなの協力を無にしないためにも、健康に気を付けて頑張ろうと思うこの頃である。

(編集長：中島洋一)

### 本誌は次のところでお取り次ぎしています

北海道	ヤマハ・ミュージック札幌店	011-512-1726
福島	福島大学生協	024-548-0091
千葉	紀伊国屋書店千葉営業所	043-296-0188
東京	ミュージックトレード社	03-3251-7491
	オリオン書房外商部	042-529-2311
	(株)紀伊国屋書店 和雑誌アクセスセンター	03-3354-0131
	アカデミア・ミュージック(株)	03-3813-6751
	全国学生協連合会図書サービス	03-3382-3891
	早稲田大学生協ブックセンター	03-3202-3236
神奈川	昭和音楽大学購買店	046-245-8100
静岡	吉見書店	054-252-0157
愛知	正文館書店外商部	052-931-9321
	星野書店	052-961-2526
	マコト書店	052-501-0063
大阪	(株)ヤマミュージック大阪心斎橋店	06-211-8331
	ユーゴー書店	06-623-2341
兵庫	(株)ジュンク堂書店 外商部	078-262-7794
京都	龍谷大学生協書籍部	075-642-0103
沖縄	沖縄教販(株)	098-868-4170

---

編集長：中島洋一 副編集長：橘川 琢

編集スタッフ：新井知子 浦 富美 大久保靖子 栗栖麻衣子 高島和義 高橋 通 高橋雅光  
戸引小夜子 北條直彦 湯浅玲子

---

### 音楽の世界 6月号(通巻519号)

2010年6月1日発行 定価500円(本体476円)

発行人：芙二 三枝子

編集・発行所 日本音楽舞踊会議 The CONFERENCE of MUSIC and DANCE JAPAN

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-1-6 寿美ビル305 Tel/Fax:(03)3369 7496

HP: <http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/> E-mail: [onbukai@mua.biglobe.ne.jp](mailto:onbukai@mua.biglobe.ne.jp)

A/D: 音楽の世界編集部 Tel: (03)3369 7496 印刷: イゲタ印刷(株) Tel: (04)7185 0471

購読料 年間: 5000円 (6ヶ月: 2500円) 振替 00110-4-65140 (日本音楽舞踊会議)

\*乱丁、落丁がございましたらお取替えます。